

天飛ぶや 輕の路は  
我妹子が 里にしあれば  
ねもころに 見まく欲しけど やまず行かば

人目を多み 数多く行かば  
人知りぬべみ さねかずら  
後も逢はむと 大船の 思ひ憑みて

玉垣る 磐垣淵の 隠りのみ  
恋ひつつあるに  
渡る日の 暮れぬるがごと  
照る月の 雲隠るごと

沖つ藻の 靡きし妹は  
黄葉の 過ぎて去にきと

玉梓の 使の言へば  
梓弓 音に聞きて

言はむすべ 為むすべ知らに  
声のみを 聞きてあり得ねば  
わが恋ふる 千重の一重も

慰もる 情もありやと  
我妹子が 止まず出で見し 輕の市に  
我が立ち聞けば 玉たすき 畝傍の山に

鳴く鳥の 声も聞こえず  
玉梓の 道行く人も 一人だに 似てし行かねば  
すべをなみ 妹が名喚びて 袖ぞ振りつる

秋山の 黄葉を茂み  
迷ひぬる 妹を求めむ 山道知らずも

黄葉の 散りゆくなへに  
玉梓の 使いを見れば 逢ひし日思ほゆ

あまとぶ かる  
わぎもこが

まねく

おもいたのみて  
いわがきぶちの  
こもりのみ

なびきしいもは  
もみちばの  
たまづさのつかい

おと  
せむ  
おと

ちへのひとへ  
なぐきもるこころ  
かるのいちに  
うねび

たまほこの  
いもがなよびて

もみち (喪途)  
やまじ

たまづさ